

【無料配布】短編ミステリ

文学フリマ大阪14書き下ろし

作・庵字^{あんじ}

一生に一度のライブ

探偵の事務所を訪れた警部は、ほぼ彼の専用席と化しているソファに座ると、
「先週、交通事故があったろ、ばくはつ五郎とかいう芸人の父親が死んだ」

「『爆弾岩太郎』ですよ」芸人の名前を訂正しつつ探偵は、アイスコヒーを振る舞うべく冷蔵庫を開けて、「爆弾岩本人だけでなく父親も面白い人で、何回かテレビに出たこともありましたから、ニュースで大きく扱われていましたね」

「その事故だがな、実はおかしい点がある。被害者が……撲殺されていたんだ」
「撲殺？ どういう意味です？」

「そのままの意味だ。事故を起こした直後、重傷を負いながらも、被害者はシートベルトを外して車外に這い出たらしいんだが、そこで後頭部に一撃くらっている。凶器は拳大の石で、現場に落ちていたものと見られてる」

「……車外に出たところ、転んで石に頭をぶつけたとかじゃないんですか？」

「違うな。明らかに人為的なもの——他殺——だ。凶器の石から鮮明な指紋も出ている。前科者リストに該当者はなかったがな」

「車に同乗者はいなかったんですよね」

「ああ、それは間違いないと思う。事故を起こす十数分前に、幹線道路沿いの監視カメラに被害者の車が映っていたんだが、被害者しか乗っていないかった」

「交通事故の原因は、なんなんですか？」

「おそらく、助手席のあるスマホを手にとろうとして脇見をした拍子にハンドル操作を誤ったんだろうな。スマホが助手席の足下に落ちていて、事故発生の直前と見られる時間にメッセージアプリの着信があったことが記録されているが、企業アカウントからの宣伝で、登録者全員に一斉配信されてる」

「何者かが事故の誘発を期待して送ったわけではないんですね」

「そうだ。交通課の見立てでは、事故自体は完全に偶発的なものとして処理しているということだ。ただ一点……事故後に後頭部を殴られた、ということを除いてな……。俺が君の事務所に来た理由が分かっただろ」

はあ、とため息を漏らして、探偵は、

「他ならぬ警部の頼みですからね。もちろん引き受けますよ」

「そう言ってくれると信じていたよ。警察の捜査で判明していることを教えよう。まず、怨恨の線はさっぱりだな。被害者はごく普通の勤め人で、職場や取引先からの評判もいい。妻との仲も睦まじいと近所でも評判だそうだ。息子との関係も、すこぶるいいらしいな。ひとり息子が芸人になったことを方々に自慢していて、出演する番組はすべて録画していたそうだ。ライブにも可能な限り足を運んでいて、事故を起こしたその日も、息子の単独ライブ会場に向かう途中だったらしい」
「当日に爆弾岩太郎のライブがあったんですか？」

「ああ、遺体の身元確認に時間がかかったから、結局息子に父親の事故死が知らされたのは、ライブが終わって一時間程度経過してからだったそうだ」

「爆弾岩太郎は、父親が死亡したことも知らずにライブをやりにきっていたと」

「事故死を知らせた警察官の話によると、かなり意気消沈していたそうだ」

「無理もないでしょうね」

「金銭面からもなにも出てきていないな。大きな財産はない代わりに借金もない。まあ、息子のギャラは別にしてだ」

「爆弾岩太郎は、最近放送されたテレビのお笑い大会優勝でブレイクして、いまやもっともライブチケット入手が困難な芸人になりましたが、それまではテレビの露出もほとんどない無名の芸人でした。ですから、ため込むほどのギャラがあったとは思いたいですね。彼自身、優勝前は月給が数百円なんてざらだった、とテレビで言っていましたから」

「そうなのか。厳しい世界なんだな。あと……これは事件に関係があるかどうか分からんが、運転時、父親は運転免許証を持っていなかったらしい」

「免許証不携帯というやつですか？」

「だな。財布の中からも車内から見つからなかった。それで現場で身元確認が出来なかったから、車検証で持ち主を照合したんだ。とはいえ、車を誰かに貸していたという場合もあるから、車の持ち主と被害者が同一人物だと確認が取れるまで時間が掛かってしまったって交通課のやつがばやいていたよ。スマホは四桁のナンバーでロックされていて開けなかったそうだしな」

「……警部、その免許証は、結局見つかったんですか？」

「いや、まだだ。家族が探しているが、見つかったという連絡はない。事故の目撃者もいない。現場は人通りの少ない道路で、車も歩行者も一時間に一台やひとり通れば多いほう、という感じらしい。防犯カメラもない。それと、これも事件に関係があるとは思えないが、父親の車の後方にタイヤのブレーキ痕があった」

「多重事故、ではないんですね？」

「そうだ。父親の車の後部にはいっさい損傷はなかったので、後続車が追突したということもないし、車のどこからも他の車の塗料なんかは発見できなかった。交通課の見立てでは完全な自損事故だ」

「車間距離を空けて走行していた後続車が、前の車が事故を起こして慌ててブレーキを踏んだとか？」

「だったら、事故を起こした運転手を介抱するとか、せめて通報くらいしてくれてもいいだろ。まあ、警察沙汰に巻き込まれたくなくて無視したのかもしれないが、それにしたって冷たすぎるだろ」

「ちょっと待ってください。じゃあ、事故はそもそも誰が通報したんですか？」

「対向車線を走っていた車の運転手だ。事故の原因がさっき言ったスマホの企業メッセージにあるとしたら、通報されたのは事故発生から三十分後になる。いまのところ、分かっている情報は以上だ。よろしく頼むぞ」

と警部は、シロップを大量投入した甘いアイスコーヒーを飲み干して事務所を出て行った。

数日後、呼び出しに応じて再び事務所を訪れた警部に、探偵は、

「犯人が推理できました。犯人は、事故車に後続していた車の運転手です」

なに？ と驚く警部を前に、探偵は話を続ける。

「経緯はこうです。被害者が起こした事故を目撃した後続の運転手は、車を急停止させて駆け寄ります。この時点では、その運転手も救急に通報するつもりだったのでしょうか。が、そうはしませんでした。なぜか。事故を起こした人間が、爆弾岩太郎の父親だと知ったからです。爆弾岩の父親は何度かテレビに出たことがありますから、顔を見て素性を知る人がいてもおかしくありません。だから……運転手は近くにあった石でもって被害者を撲殺したんです」

「待て！ どうしてそうなる？」

「僕は、あれから、爆弾岩太郎が出ていたテレビ番組や配信動画を見まくって、彼がある発言をしていたことを突き止めました。その発言というのは……」

探偵は、机にあった旧式のノートパソコンを持ってきて、動画を再生させた。あるトーク番組の一場面で、爆弾岩太郎が話しはじめたところだった。

『……先輩から、「芸人なら親の死に目よりも舞台を優先させろ」なんてよく言われていましたけれど、僕はそんなの御免ですね。親が危篤だなんて知らされたら、なにを置いても駆けつけますよ。今はそんな時代じゃないし、そのせいで舞台に穴が空いたとしても、ファンだって分かってくれますよ』

「犯人は、爆弾岩のこの発言をテレビで見て知っていたのでしょうか」動画を止めて、探偵は、「そこでこう考えた。このまま事故を通報してしまったら、爆弾岩太郎に連絡が行くことは間違いない。そうになったら、どうなるか……」

「それは……まさか……？」

「そうです。父親の危篤、あるいは死亡を知った爆弾岩太郎は、間違いなくライブを中止して病院へ飛んでいくでしょう。それを阻止するため、犯人は被害者にとどめを刺し、免許証を奪ったんです。自分以外の誰かがこを通って通報したとしても、死人は自分の名前や素性を告げることは出来ませんし、免許証がなければ被害者が誰かを特定するのにも時間がかかりますからね。被害者のスマホはロックが掛かっているから大丈夫だと踏んだのでしょうか」

「結果、爆弾岩太郎のもとに父親が奇禍に遭った連絡が行くのも遅くなる……」

「そういうわけです。犯人は、よほど爆弾岩太郎のライブを楽しみにしていたのかもしれない。不慮の事態で公演が中止になることなど許せないほどに……」

「つまり……その日のライブの客で、車の運転が出来る——運転免許を持っている人物を当たっていいわけだな」

警察の捜査により、石の指紋が一致したことで犯人は突き止められた。犯人は二十代の女性だった。低賃金で生活を切り詰め、高騰した転売価格でやっと手に入れた大好きな芸人のライブ。上司に散々嫌みを言われながら休暇も取った。これは自分にとって一生に一度のライブだったんだ、と犯人は語っていたという。

お読みいただきありがとうございます。

「新生ミステリ研究会」てー53〜54に、ぜひまたお越しください！